岩波ジュニア新書 140

戦場で死んだ兄をたずねて

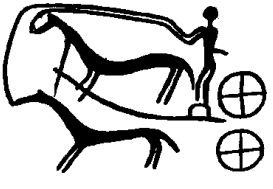
フィリピンと日本

長部日出雄著

戦場で死んだ兄をたずねて

——フィリピンと日本——

長部日出雄著



岩波ジュニア新書 140

戦場で死んだ兄をたずねて　　岩波ジュニア新書 140

1988年5月20日　第1刷発行 ©

定価 580円

著　者　長部日出雄（おさべひでお）

発行者　緑川亨

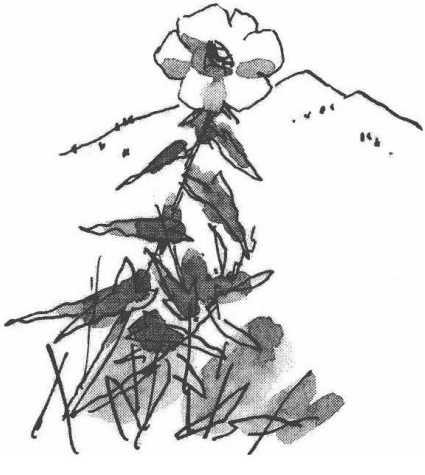
〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan
ISBN4-00-500140-8

目

次



I 戦争に負けた日……1
魔法の鍬　消える食物　弱虫の大奮闘
ジャガ芋の花　友だちの大発見
魔法の鍬の秘密　負けた日の夕方
II 帰ってこない兄……27
アメリカ軍が来た　墨をぬった教科書
芋畑から野球場へ　イタコの家に行く
斬りこんだ兄
III 新聞記者になりたい……53
あこがれの野球部　野球狂時代　春の序曲
記者か作家か　迷信よさらば
IV 母の死……79
小説を書きに　価値観の迷い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

イタコの呼ぶ声　津軽の発見

V　ルソン島の山岳地帯へ……107
メリエンダの味　奥地への準備
さまざまなみちびき　異国への予備知識
山岳地帯に入る

VI　兄が死んだ場所……129
八番目の不思議　まぼろしの邪馬台国
兄が死んだ場所　月見草に似た花

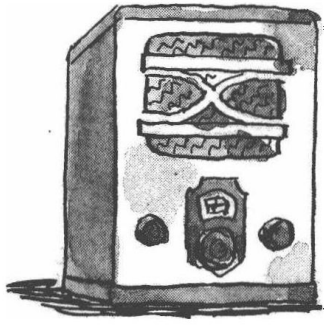
VII　戦場にされた土地のひとびと……151
さまざまなことば　衝撃的な事実
イフガオの神話　兄たちの斬りこみ
もうひとつの戦場

Ⅷ　死者との対話……189
　みどりの木陰で
あとがき……205

本文カット＝高橋宏一
地図＝佐藤恵子

I

戦争に負けた日



魔法の鍬

鍬って、どんなものだか、知ってる？

都会の子どもなら、もう博物館にでも行かないと、見られないかもしれないな。うちが農家だったり、お父さんやお母さんが家庭菜園をやったりしていたら、見たことがあるかもしれない。

そう、田んぼや畑の土をほって、耕すときに使うものだ。いまはたいていの仕事を機械でやるようになったけれど、人間が農業にいちばん頼って生きていた昔は、朝から晩までこれを手にして一所懸命に働いて、一家の暮らしをささえてきた大切な道具だ。

子どものころ、ぼくは魔法の鍬をもっていた。それはすごい力を秘めていて、ほかの鍬の何倍もの働きをする。だから、あてがわれた仕事を、おなじ年頃の仲間たちが、びっくりするほど早くできた。

この魔法の鍬について語るためには、まず、ぼくが生まれ育った町の説明からはじめなければならない。

わが国の本州の北端を、青森県というのは知ってるね。まんなかから縦にふたつに割って、日本海側のほうの半分にあたる津軽のほぼ中央に、岩木山という山がある。

標高一六二五メートル――。それほど高くはないが、まわりに山がないので、平野から裾をひいて聳えたつ姿は、とても美しく見え、地元の人たちは津軽富士とも、あるいはたんに「お山」とも呼んで、深い愛情をよせている。

敬愛の念といったほうが、もっと正確かもしれない。朝な夕なに一生、眺めて働きつづけたお年よりが、この山にたいする気持ちは、ほとんど信仰といってもいいくらいだ。

岩木山の山麓から、十キロほど離れたところに、ぼくが生まれた弘前市がある。当時は人口が約五万の静かで小さな城下町だった。

もっとも、子どものころから小さな町とおもっていたわけではない。本州北端の小都市とわかったのは、地図が頭のなかに入ってからで、まだほかの土地をいっさい見たことがなく、むろんテレビもなかった時分には、とうぜん目にうつる景色が、世界のすべてで、自分の住んでるところがそこの中心だと信じこんでいる。

そのうえ、育った場所がにぎやかな商店街だったから、自分は町の子どもで、田舎というのは、弘前の家並みが切れたところから外にひろがる農村地帯のことだとばかりおもっていた。

幼年時代のアルバムを見ると、母親に抱かれた赤ん坊のつぎに目につくのは、鉄砲や軍

刀のおもちゃをもって、軍人のかっこうのまねをしている写真だ。当時、わが国の軍隊は、中国大陸へ行って戦争をしており、映画館で上映されるニュース映画は、勇ましい進軍ぶりや勝利のもようを毎週のようにつたえ、ラジオからはしょっちゅう、日本という国のすばらしさや、どこにも負けない軍隊の強さや、戦争の正しさをたたえる歌が流れだして、聞く者の胸をわくわくさせた。

いまに大きくなったら、自分も軍隊に入り、戦争に行って、「お国」のために戦うのだと、ぼくだけでなく、日本中のたいていの子どもが、心にきめていたはずだ。

ぼくらが入学した昭和十六年から、小学校は国民学校と名前が変わった。その年の十二月八日、わが国は、こんどはアメリカやイギリス、オランダなどの諸国にたいして、宣戦を布告(ふこく)した。そのときのいい方では大東亜(だいとうあ)戦争、のちのことばでいえば太平洋戦争がはじまったのだ。

そして最初に飛びこんできたのは、

——わが帝国海軍の空母六隻(せき)をふくむ第一航空艦隊を主力とする機動部隊は、アメリカ海軍の重要基地であるハワイの真珠湾(しんじゅわん)(オアフ島パール・ハーバー)を急襲し、米太平洋艦隊の戦艦五隻を撃沈、三隻を撃破したのをはじめとして、ほかに多くの艦艇(かんてい)、数百機の航

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

空機、および陸上施設に、大損害をあたえた。……

という圧倒的な勝利のニュースであったから、ぼくらはすっかり興奮して躍りあがった。

消える食物

そればかりではなかった。昭和十六年から翌年の春にかけて、アメリカの支配下にあったり、イギリスやオランダの植民地であった東南アジアの国国を、日本軍はつぎつぎに攻め落として占領した。連戦連勝の知らせに国中が沸きたった。アジアを中心にした「大東亜地図」を部屋にはって、ぼくは日本軍が進撃した地域に、色鉛筆でしるしをつけた。東南アジアはほぼ全域が、あっという間にわが国の占領下に入った。

国民学校の二年生になって習った修身の教科書には、

「日本　ヨイ国　キヨイ国。世界ニ　一ツノ神ノ国。日本　ヨイ国　強イ国。世界ニカガヤク　エライ国」

という文章があった。日本は世界中でたったひとつ、清く正しく、だからこそ強い神の国だ。神である天皇陛下に命をささげた兵隊は神兵だから、どこと戦っても決して負けるはずはない。ぼくは心からそう信じた。

戦争がはじまった最初のころの勢いからすれば、アメリカもイギリスもオランダも、やがて降伏して、神国日本がアジアはもちろん、全世界を治めるようになるのも、夢ではな

いとさえおもわれた。

戦争はずっと勝ちつづけているはずであったが、弘前の町のたたずまいは、だんだん変わってきた。

つぎつぎに徴集や召集をうけて兵隊になっていくので、町から若い男の姿がめっきり少なくなった。三年生までの担任であった成田哲三先生も出征した。教育熱心で、教室のなかに小さな図書館をつくったりするくらい、理想に燃える青年教師だった成田先生に、ぼくはとてもかわいがってもらったのだけれど、とくに別れを悲しんだ記憶はない。きっと戦争に行くのは、りっぱで勇ましいことだと考えていたからだろう。

食べるものも着るものも、ごく少なく量を制限された配給制になり、ふつうの商店は売る品物がないので、休業したり廃業したりするところがふえた。ぼくの家の向かいはパン屋で、長いこと朝早くから焼きたての香ばしいにおいを漂わせていたのだが、いつのまにか店をしめ、どこかへ引っ越して行ってしまった。

盛岡の高等工業学校へ行っていたぼくの長兄も、青森の工業学校に行っていた次兄も、ともに卒業すると間もなく、入営して陸軍の兵隊になった。

新聞記者をしていた父親が死んでから、母親が五人の子どもを育てるためにやっていた

カフェーという水商売が、戦時下にはふさわしくないと、警察から休業を命じられて、急にがらんとした家のなかに、母とぼくだけが残された。

町のたたずまいと、家のなかの感じからすれば、戦争というのは、人と物がどんどん急速にすがたを消していくことだった。

なかでもこたえたのは、食料の不足だ。米の少なさをおぎなうため、なんだかわけのわからない材料に野菜の切りくずなどをまぜこんだ「愛国パン」や、海草でつくった麺類や、さまざまな代用食が配給されたが、それでも育ちざかりで食べざかりの胃袋にはたりず、ぼくはいつも空腹をかかえて、がつがつしていた。

衣料の配給もめったにないので、みんなつぎはぎだらけの服を着て、ひどくやせこけ、手足が細くなって、頭部とくに額の大きさだけが、やけに目立った。そのころの学級全員の写真を、いまの小学生に見せたら、どこか遠い国で飢饉におそわれた難民キャンプの子どもたちとしかおもえないだろう。

国民学校四年生の新学期がはじまって間もないころ——。担任の先生が、

「こんど校庭の半分を、畑にするから、家に鍬がある者は、もってくるように……」

といった。

弱虫の大奮闘

ぼくらが通っている弘前市第一大成国民学校のまわりには、まだ田んぼがいくらか残っていたが、学区の大半は町なかの商店街や住宅地で、農家の子どもはいなかった。だから、鍬をもっている家なんか、そんなにあるはずがない。学校から家に帰って、ぼくは母親に、先生のことばをつたえた。さきごろやめてはいたが、ついこないだまで女の人が、お客に酒のお酌をしたりしてサービスするカフェーだったわが家にも、鍬はなかった。

だが、母親は戦争がはじまってから、世間の目がまえよりも冷たく、きびしくなっていた水商売の家の子に、肩身のせまいおもいをさせたくなかったのかもしれない。どこからか、一本の鍬を手に入れてきた。

ぼくは勇んで、それを担いで登校した。驚いたことに、ほかにも鍬をもってきた生徒は、ずいぶん多かった。新聞やニュース映画では、よく「食糧増産」がさけばれていたし、学校の校庭を畑に変えるのは、お国のために大切なことだからと、やはり親が懸命に探しだしてきて、子供にもたせたのだろう。

母親が手に入れてきてくれなければ、かなり肩身のせまいおもいをしたにちがいない。そうおもって、ほっとしたが、ほかのみんなのにくらべて見ると、ぼくのは形も大きさも

だいぶちがっているのに気がついた。

子どもは、自分の持ち物や着ているものが、みんなのとちがうと、ひどく恥ずかしい感じがするものだ。鍬というのは、長い木の柄の先に、鉄でつくられた刃がついている。ぼくのは、まず柄がめだって短い。鉄の刃も、ほかの人のは長方形なのに、こちらは真四角に近くて、みょうにぶあつい。見れば見るほど、ずんぐりして変な形だ。友だちの顔つきも、

——おかしな鍬だなあ。

と、笑っているような気がして、こんどはこんなヘンテコなものをもたせてよこした母親をうらみたくなった。

ところが、いざ、ぼくらの学級に割りあてられた場所に、打ちおろしてみたら、そのヘンテコリンな鍬は、ほかのとはくらべものにならないほどすごい威力を発揮した。

学校の校庭は、運動場でもあるから、重いローラーをかけられて地面がかちかちに固められている。そこへ打ちこむと、ほかの鍬の長方形でうすい刃は、なかなか土にくいこめず、何度もくりかえすうちに、先のほうの鋭く研がれた部分が、めくれあがってしまうのに、ぼくの真四角でぶあつい刃は、がっちりと食いこんで、土をよくほりおこせるのだ。

柄が短いのも有利だった。当時の成績表で見ると、ぼくの身長は一二七センチ、体重は二七・五キロ。仲がよかった友だちの古川君も似たりよったりで、身長が一二四・五センチ、体重が二六キロ。みんなまだ背が低かったうえに、腹をすかせて、やせたひょろひょろの体だったから、柄のながい鍬は、うまくふりまわせない。

こっちは夢中になって柄の短い鍬をふるい、気がついてみたら、ちょうど駆けっこのコースのように、一本ずつ割り当てられた細長い地面を、ほかの人が一メートルもほりおこせずにいるうちに、ひとりだけ三、四メートルもほりすすんでいた。しかも、刃が深いところまで食いこむので、盛りあがった土の列も、ぐんと背が高かった。

灰色の地面の下から、黒い部分が顔をのぞかせると、新鮮な土のにおいが、すがすがしく鼻に感じられて、とても気持ちがいい。

ぼくは学科の成績はよかったけれど、運動神経がにぶくて、体操の時間に跳び箱を最後までとべない何人かのなかに入っており、けんかも強くなかった。どちらかといえば、弱虫のほうだったから、はじめて体を使って人の何倍もの力を示すことができたのがうれしくて、畑仕事が大好きになった。

自分で得意だとおもいこむと、子どもはそれに熱中する。放課後、家に帰ってからも、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook